

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 韓国語の文末名詞化構文・連体終止形に関する認知類型論的研究  
—日本語との対比を通じて—

氏 名 吳 守 鎮

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、形式名詞及び名詞化辞として用いられる韓国語の「kes」に注目し、文末に生起する「kes」に由来する諸形式（「N ke(s-ita)」「1 kes(-ita)」「tanun ke(s-ita)」「kes-kathun」）をはじめ、それと関連する周辺的な形式（「um-ita」「ki-ita」「一般述語」の連体終止形）に関して考察を行ったものである。なお、韓国語の一部の形式においては日本語との対照を行うことにより、韓国語と日本語の類似点や相違点を明らかにした。各章での論の展開は以下のとおりである。

第1章では、本研究の研究対象および研究背景と研究目的、そして研究方法について詳述した。

第2章では、本研究の研究対象として取り上げている新奇表現を、1つの構文として捉えており、その理論的枠組みとして「認知類型論」、「文法化」、「ポライトネス理論」などを採用している。本章では本研究と密接な関連性を持つ知見を導入することにより、本研究の研究対象である既存の文末形式及び新奇表現の機能を明らかにする有用な手法であることを主張した。

第3章では、本研究の研究対象は「文末名詞化構文」と「従属節の主節化」現象に位置づけられる文末形式であるため、「文末名詞化構文」のうち「形式名詞+コピュラ」形式と、「従属節の主節化」現象では、「連体終止形」に関する先行研究を中心に紹介した。本研究では韓国語を基準言語としているため、両者の韓国語に関する先行研究を概観した上で、日韓対照の観点からみた先行研究を紹介し、その問題点を指摘した。

第4章では、既存の「N」と「l」のような連体形語尾以外に、「tanun」も連体形語尾の1つとして見なすことによって、すでに定着した「説明」の「N kes-ita」、「推量」の「l kes-ita」はもとより、「tanun kes-ita」も「kes-ita」構文に位置づけられる可能性を示唆した。さらに、今までコピュラ無しの文末名詞化構文に関する研究成果は殆どなかったが、すでに固定化した「命令・忠告」の「l kes」を踏まえ、「tanun ke」や「N ke」に関してもコピュラ無しの「ke(s)」構文への位置づけを試みた。

具体的には、韓国語のコピュラ付きの「tanun kes-ita」やコピュラ無しの「tanun ke」「N ke」を主な研究対象として考察を行った上で、日本語の文末名詞化構文との対比を行った。まず、韓国語のコピュラ付きの「tanun kes-ita」は「伝聞」「換言」の機能以外に、当該の事柄に対する書き手自身の感情や評価、考えなどを表す際に、「自己引用」のマーカースとして生起し、「間接説明」という新たな機能への拡張が見られた。また、コピュラ無しの「tanun ke」は、書き手自身が置かれている当該の事柄を読み手にアピールしようとする「報告・伝達」の機能のほか、様々な語用論的機能を獲得しており、この機能は「ポジティブ・ポライトネス」や「主観化」「間主観化」のマーカースと密接な関わりを持つ。さらに、コピュラ無しの「N ke」はコピュラ無しの「tanun ke」とは異なって読み手をあまり前提とせず、書き手自身に関わる事柄に対して「断言・主張」する機能が見られた。

次に、韓国語の「tanun ke(s-ita)」と日本語の「ということ(だ)」との対比について述べる。日本語の「ということだ」は、韓国語の「tanun kes-ita」と同様に「伝聞」「換言」の機能を示しつつも、「tanun kes-ita」のように、書き手自身が当該の事柄に対して自分の感情や評価、考えなどを自ら引用して示す「間接説明」という機能は獲得していない。また、コピュラ無しの「tanun ke」はコピュラ付きの「tanun kes-ita」に比べ、様々な語用論的機能が生産的に見られる。これに対し、コピュラ無しの「ということ」は疑問文として用いられたり、「かな」のような疑問を表すマーカースと共に起る傾向が見られるものの、用いられる場面の丁寧度の違いを除けば、コピュラ付きの「ということだ」と機能上の相違はあまり見られないことが分かった。

そして、「tanun ke(s-ita)」が含まれている韓国語の「kes(-ita)」構文は、コピュラの有無を問わず、前接する連体形による機能の分化が見られるが、「ということ(だ)」が含まれている日本語の「こと(だ)」構文はコピュラの有無を問わず、前接する連体形によって部分的な機能の分化が見られた。

第5章では、韓国語の名詞化辞「kes」「um」「ki」から文末名詞化構文「kes-ita」「um-ita」「ki-ita」への形態・機能上の拡張を主張し、考察を行った。まず、「kes-ita」の場合、「N kes-ita」は「説明」、「l kes-ita」は「推量」という、前接する連体形語尾の時制による機能の分化が固定化しており、それぞれの個別形式に関する研究は多い。そのため、本研究では両者の文法化の程度を測る有用な分析手法として「形態の拘束性 (boundedness) (Traugott 2003)」という概念を援用し、「N kes-ita」と「l kes-ita」の文法化の度合いについて分析した。

その結果、過去・現在連体形が前接する「N kes-ita」は、「kes」と「ita」の間に複数・限定を示す接辞が共起したり、「kes」が「存在・事物」を表すなど、「kes」と「ita」が分割可能な場合が、未来連体形が前接する「I kes-ita」に比べ、多少高かった。よって、「N kes-ita」のほうが「I kes-ita」に比べ、文法化が進んでいないことが確認できた。また、「um-ita」に関しては、尊敬のマーカ―「si」が共起する「sim-ita」の分析を通して、無標の「終止形」で出現することができるにも関わらず、文末名詞化構文として出現する動機づけと、尊敬のマーカ―「si」の機能拡張について明らかにした。その結果、無標の「終止形」を「um-ita」のような文末名詞化構文に置き換えることによって、書き手自身の感情や評価、考えなどを直接読み手に訴えることを避ける効果が生まれることが分かった。なお、読み手にとっては、当該の事柄に対する押し付けがましさが緩和されることになり、その解釈は読み手に委ねることができた。

また、韓国語の「sim-ita」は文末名詞化構文でありながら、尊敬のマーカ―を含んでいることから、その形式に最も類似していると見られる日本語の「お～だ」文と対照を行った。元々「尊敬」を表す「si」は「皮肉」「親愛」への機能拡張が顕著に見られるなかで、「sim-ita」は「尊敬」や「皮肉」「親愛」など、「si」の語彙的意味を残したまま、名詞述語文としての役割を果たしている。これに対して、「お～だ」文は尊敬表現と名詞述語文との見分けが困難なこともあり、「お～だ」文が「状況叙述」を表す場合は、完全に「尊敬」の意味を喪失していることが分かった。

最後に、「ki-ita」に関しては、「ki」と「ita」が分割可能な場合と、一語化した場合とがある。前者は「AはがBだ（ $A \in B$ だ）」のような構造をとっており、「ki」はBに相当するもので、名詞化辞として振る舞っていることが分かった。これに対し、後者の場合はひとまとまりの形式として「原因・理由」を表し、韓国語の「原因・理由」を表す「ki ttaymwun-ita」から「ttaymwun」が省略された可能性を提示した。さらに過去を表すマーカ―と共起するコピュラ無しの「ki」を取り上げ、両者に属さない根本的な理由と、特化したその形式の機能について論じた。

第6章では、韓国語の「従属節の主節化」現象の1つとして「連体終止形」を取り上げ、(I)「連体終止形」の「kes-kathun」と、(II)「一般述語」の「連体終止形」について考察を行った。まず、(I)に関しては、韓国語の「kes-kathun」は「現実」を表す過去・現在連体形と、「非現実」を表す未来連体形が共起することができる。

まず、過去・現在連体形が前接する場合は、すでに行われた現実の事柄に対して「類似性」を表す「kes-kathun」で文を締めくくることによって、「断定の回避」のような「ネガティブ・ポライトネス」の機能を果たす。これに対して、未来連体形が前接する場合は、まだ行われていない事柄を将来実現されるかのように捉え、相手に理解や共感を呼び起こすなど、「ポジティブ・ポライトネス」の機能が見られる。いずれにせよ「kes-kathun」の機能は、連体終止形として文末に単独で生起するものの、「類似性」を表す本来の語彙的意味によるものであることを主張した。さらに、韓国語の「kes-kathun」と日本語の「みたいな」との対照を行った結果、

「kes-kathun」はインターネットのブログを中心とした書き言葉というジャンルの限定が見られ、英語の「like」、フィンランド語の「niinku」、スウェーデン語の「liksom」などのように類似性を表す語から引用マーカーへの機能獲得は見られない。これに対して、「みたいな」は話し言葉で用いられ、引用マーカーへの機能拡張が確認できた。すなわち、韓国語の「kes-kathun」と日本語の「みたいな」は意味・形態的に類似しており、「連体終止形」という共通性を見せつつも、語用論的な機能拡張の程度の大小という対比が観察された。

また、(II) に関しては、テロップに現れる「一般述語」の連体終止形の出現様相を「連体形以外の発話」、「非発話」、「連体形の発話」に3分類して調べた結果、「連体形以外の発話」の生起頻度が圧倒的に多かった。さらにテロップでは名詞や終止形が無標形式として頻繁に出現しており、それらに比べると、連体終止形の生起頻度は決して高くないことが分かった。それにも関わらず、テロップでは「現実」を示す過去・現在連体形を提示することによって、臨場感を与え、話し手の（非）言語行動に対して、聞き手の側での理解や共感、気づきなどを喚起する機能を体現していると論じた。そして、単に話し手の発話全体や発話の一部をそのまま再現したり、出演者の表情やジェスチャーに基づいて解釈・描写したりする際に用いられる名詞止めや終止形止めとはその機能が異なることを主張した。また、「一般述語」の連体終止形が現れる場合、圧倒的に過去・現在連体形が多く、未来連体形は殆ど観察されない傾向があり、このことから未来連体形は「類似性」を表す「kes-kathun」を付加することによってまだ行われていない事柄を表すことができるということが確認できた。

第7章では、第1章から第6章までのまとめと言語学への示唆、今後の課題と展望について述べた。従来の伝統的文法研究では論じられることのない新奇表現を取り上げ、それらを1つの構文として位置づけられることを主張した。メディアは言語使用の変化に影響を与えており（岡本他 2008）、そこで使用され始めている新奇表現の背後には普遍的な言語の変化の特徴も伺われる（窪菌 2006）とされる。よって、本研究で提示している研究対象は、インターネットのブログ、テレビ番組のテロップなど、いわゆるメディア言語から抽出し、メディアで現れる言語形式が有用な研究対象となり得ることを示唆した。

また、一部の形式に限られるが、韓国語と日本語との対比を通じて、個別の言語では見えない機能や特徴を解明することができた。このような対照研究のアプローチは言語間の個別的な異同のみならず、諸言語の普遍性や多様性を求めようとする言語類型論へのより豊かな洞察が得られることが期待される。最後に、本研究は研究対象の拡大、データの計量化、新奇表現の定着への可能性など、残された課題もあるが、本研究で得られた研究成果は、今後韓国語学にとどまらず、言語類型論・一般言語学へ寄与するものと考えられる。